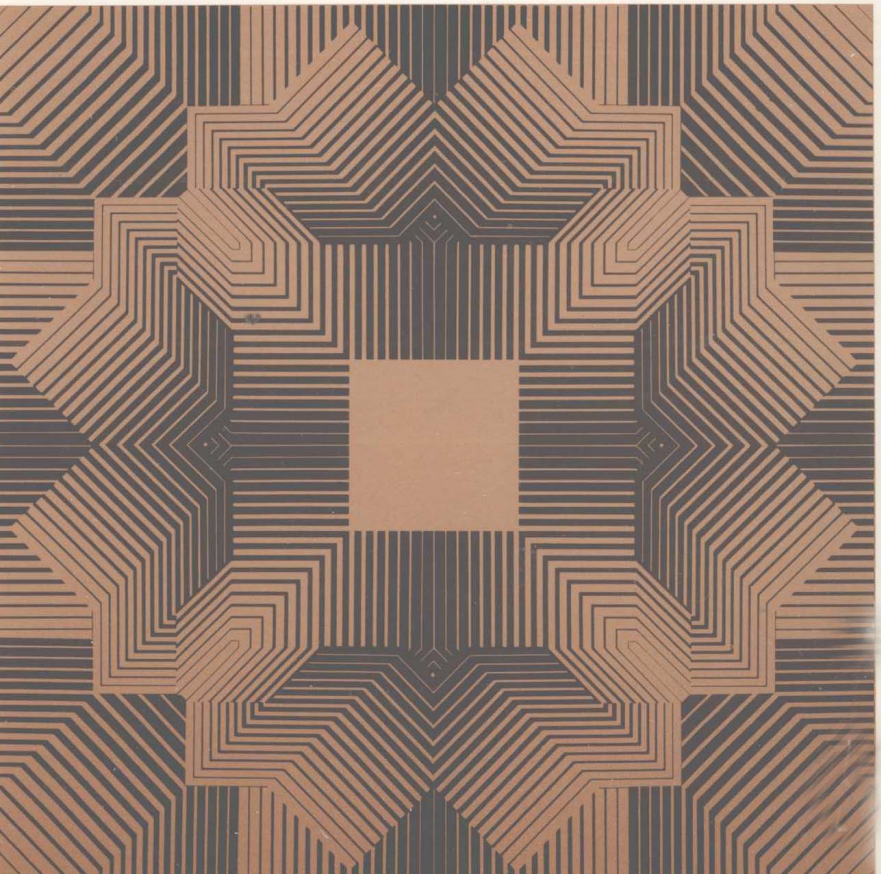
国際経済の新展開

前田芳人
小川雄平

SEKAISHISO SEMINAR



SEKAISHISO SEMINAR

国際経済の新展開

前田芳人
小川雄平

世界思想社

著者紹介

前田 芳人

1942年　鹿児島県坊ノ津町に生まれる
1966年　八幡大学法経学部卒業
1972年　大阪市立大学大学院経済学研究科博士課程修了
現　在　八幡大学法経学部助教授
著　書　（共著）『世界経済の構造と展開』（ミネルヴァ書房，1979）
　　（共著）『世界経済論を学ぶ』（有斐閣，1980）

小川 雄平

1944年　滋賀県彦根市に生まれる
1968年　滋賀大学経済学部卒業
1974年　大阪市立大学大学院経済学研究科博士課程修了
現　在　西南学院大学商学部助教授
著　書　（共著）『多国籍企業と発展途上国』（東京大学出版会，1977）
　　（共著）『第三世界と国家資本主義』（東京大学出版会，1980）

国際経済の新展開　　**定価 1,600円**

1982年6月20日　初版発行

検印廃止

著　者　前田 芳人
　　小川 雄平

発行者　高島 国男

世界思想社

本　社　京都市左京区岩倉東五田町77
　　電話（721）6506～7　振替京都2908
東京支社　東京都千代田区神田神保町3－19
　　電話（230）2483

©1982　MAEDA, OGAWA　Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取替えいたします

（寿印刷・藤沢製本）

ISBN4-7907-0234-0

まえがき

現代社会は、経済を限りなく肥大化させるシステムのうえに成り立つ特殊歴史的な社会であり、その動態の規定因が生産力の急速な上昇にあることは疑問の余地のないところである。われわれ人類が直面している地球生態系の破壊や人間関係の崩壊(第三世界の低開発性も含む)などの極めて深刻な事態は、そうした経済システムの所産でありながら、「経済」だけを対象にしていては、その全貌を明らかにしえない性質のものになっていて、生産力の質を問い、新たな社会発展の原理を見出さなければ解決不能な地点に到達してしまっているように思われる。本書を貫いている現代工業社会に対する基本認識は、以上につきる。もちろん、われわれは、コンピューター時代・ロボット時代と呼ばれたり、あるいはまたバイオテクノロジーなどのいわゆるニュー・テクノロジー時代の到来を知らない訳ではない。それは、「北」の先進工業国だけでなく、「南」の第三世界に対しても〝救世主〟たりうるとの見方もある。しかし、それらの先端的なテクノロジーは、正常な人間関係と結びつきうるような新たな原理を担っているようには思われない。むしろ、これまでの経済システムの延長上で経済の肥大化をますます促進する〝前のめり大敗走〟(シュマッハー)的方向をいぜんとして突き進んでいるように見える。

現代の世界経済を分析する視点として、われわれは、生物経済学的・経済人類学的観点に立って、工業社会・市場社会の実在的・歴史的特質に注目し、さらに低開発認識として卓越していると思われるフランク・アミン命題を軸にすえた。その意味で、本書は従来の国際経済論の対象や方法とはいささか異なっている。現状分析では、前半で先進工業国を、後半で第三世界を扱い、それぞれの工業化の進展に対して新たな視点を提示できたと考えている。特に、第三世界の工業化の進展については、複合的発展史観に基づいて一歩進んだ分析を行っている。ここに本書の特徴があるといえる。

われわれは、経済学に固有の領域ということにあまりこだわらない。現実の経済問題はその領域をはるかにこえて存在しているからである。経済の領域を相対化する経済学の構築がわれわれにとっての課題と考えている。その意味で、生物経済学とポランニー経済人類学は、現代経済学の一つの到達点である。しかしながら、本書では、その両者を媒介する価値論を積極的に提示することはできなかった。第七章は、そのスタートラインである。イヴァン・イリッチの vernacular-value（ヴァナキュラー・ヴァリュー）理論は、極めて刺激的・示唆的であり、一定の方向性をもった理論であるので、今後はその検討も含めた新たな価値論の構築が最大の課題であると考えている。

本書は、われわれ二人のささやかな共同研究の成果である。これまでの二人の研究対象から自ずとその分担は決まったが、先進世界を見る眼と第三世界を見る眼の共通の視座を見出すのに少なからず苦慮した。現代の世界が全体として大きな転換期にあることは多くの論者に認識されてはいるが、共通の分析視座は見出されていない状況にある。そのことが本書にとっても免罪符にならないことはもちろんである。多くの経済事象について積み残しもあるし、従来の尺度からすれば、われわれの試み

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

はまったく冒険的であるかもしれない。そのことを充分承知しているし、また多くの点で未完成であることも自覚している。多くの方々のご批判を期待したいと思う。

本書が完成するにあたって、大学学部・大学院の諸先生・諸先輩をはじめ、数知れない先学の学恩に多くを負っている。いちいちお名前をあげることはできないが、ひとこと深甚の謝意を表したい。また、西南学院大学の吾郷健二氏、尾上修悟氏らと行っている研究会では、本書の基本視座ともいうべきものを学び、さらには、九州大学の平井孝治氏、坂本紘二氏、川畑茂徳氏らとの核憂合（核管理社会を憂慮し新しい道を模索する会合）では、多くの知的刺激を受け続けている。記して感謝申し上げたい。

本書がこのような形で出版されることになったのは、大阪経済大学教授尾崎彦朔先生のご推薦によるものである。先生のご期待に充分応えられず残念でならないが、これを機に前進したいと思う。最後に、われわれの我儘を快く許し、遅れがちな原稿を辛抱強く待っていただいた世界思想社編集部加藤明義氏に対し心からお礼を申し上げたい。

一九八二年　三月

著　者

目次

第一章　現代世界経済分析の視点……3
第一節　歴史としての現代　3
第二節　工業社会の実在的位置　7
1　機械と「経済」
2　工業生産と生態系
第三節　工業社会の歴史的位置――ポランニーの資本主義観――　17
1　市場システムと擬制的商品(労働(力)の商品化)――国民経済成立の基礎――
2　土地の商品化と市場の拡大
3　市場システムと貨幣制度
4　市場経済とその歴史的位相
第四節　国際分業・低開発　26
1　国際分業体制創出の論理
2　国際分業と低開発
第五節　複合的発展史観と〈低開発〉認識　36
1　複合的発展史観の潮流
2　西ヨーロッパ中心主義史観と〈低開発〉認識

第二章　高度成長と国際経済……52
第一節　IMF・GATT体制と世界資本主義　53
1　金本位制度への信仰
2　IMF・GATT体制と「再編市場システム」
3　貿易主導型の世界経済
第二節　先進工業国の高度成長メカニズム　64
1　科学技術の進歩
2　大衆消費社会の出現
3　石油の登場と水
第三節　高度工業社会と国際経済　81
1　多国籍企業と「過剰」現象
2　世界的インフレーションと市場システム
第三章　高度工業社会の諸結果……88
第一節　巨大科学技術と原子力　88
1　高度工業社会と原子力
2　原子力発電所のエネルギー収支
3　原子力と廃棄物
4　原子力発電所推進の謎と意図

第二節　資源・エネルギー問題――石油文明の一つの帰結――　99
1　石油文明の経済的側面
2　石油文明と地球生態系
第三節　農業の工業的変貌　106
1　農業の近代化・土の荒廃
2　農薬による人体への影響
第四節　もう一つの食糧問題　112
1　欧米型食生活への移行
2　食品添加物の影響
第五節　高度工業社会と人間――自然さを失った人間――　120
第四章　第三世界と工業化……125
第一節　植民地体制の崩壊と南北問題　125
1　植民地の独立と遺制としてのモノカルチュア構造
2　植民地体制崩壊の意味
3　南北問題の登場
第二節　輸入代替工業化の意義と限界　138
1　初期工業化と債務累積
2　輸入代替工業化の矛盾

3　プレビッシュの工業化論
第三節　経済発展の二つの途　150
1　ミントの工業化論と二つの途
2　輸出指向工業化と「中進国」化現象
3　従属理論と資源ナショナリズムの抬頭
第五章　「中進国」の抬頭と国際分業の新展開……163
第一節　アジアの「中進国」における輸出指向工業化と外国資本　163
1　外資導入による輸出産業の振興
2　輸出産業に占める外国資本の位置
第二節　輸出指向工業化から重化学工業化へ　172
1　重化学工業化指向の背景
2　重化学工業の現況
第三節　重化学工業化の問題点　181
第六章　経済ナショナリズムと社会的公正……192
第一節　資源ナショナリズムと新国際経済秩序　192
1　「オイル・ショック」と国連資源総会
2　NIEOとUNCTAD

第二節　ASEANと経済ナショナリズム　204
1　開発理念としての「社会的公正」
2　マレーシア・インドネシアの開発戦略
3　マレーシアの外資規制

第七章　広義の経済学の出発点――自然と人間のための経済学を求めて――……225
第一節　「土と水サイクルに根ざした社会システム」理論の提起するもの　226
第二節　ポランニーの経済観　228
第三節　「生産と消費」の問題　232
第四節　労働価値論への疑問　234
第五節　国際分業止揚の途――イヴァン・イリッチの「平和」概念とヴァナキュラー・ヴァリュー――　239
第六節　地域主義とその展開　242
1　地域主義と生活者としての個人
2　スリランカのサルヴォダヤ運動

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

国際経済の新展開

第一章　現代世界経済分析の視点

第一節　歴史としての現代

現代を「歴史としての現代」としてとらえる試みは、多かれ少なかれすべての学問に共通することである。アメリカの有名なマルクス主義者P・M・スウィージーは、「現代がやがては歴史になるであろうことは誰でも知っている。社会科学者の最も重要な課題は、現在がまだ現在であるうちに、そしてわれわれがまだその形と結果を動かしうる力をもっているうちに、それを今日の歴史として把握しようと努めることである」[1]と述べて、『歴史としての現代』を著したが、まったく現代ほど「歴史としての現代」の視点の必要な時代はないのではなかろうか。というのは、われわれ現代人の直面している問題は余りにも広くかつ深刻であるからであり、現代はまだわれわれの手のうちにあるからである。

現代社会の混迷は、南北問題＝低開発問題、自然破壊、資源・エネルギー問題を採りあげてみるだけでも、われわれの生存・生活基盤の破壊と関係して深刻であるし、いまだ人類が経験したことのない事態である。すなわち、現代社会の〈経済〉そのもののあり方が問われており、われわれが当然のこととして疑問の余地なく受け入れてきた近代的な諸価値それ自体が問われているといってよい。一九六〇年代の後半頃をほぼさかいにして、現代社会における問題の所在が次第に白日のもとにさらけ出されてくると同時に、経済学でも現代社会のとらえなおしが研究の基本課題になってきたように思われる。(2)

現代を「歴史としての現代」として把握することは極めて難問である。どのような歴史認識が現実の事態をより正確に理解しうるか、百パーセントの絶対性はもちろんないが、われわれは「市場と工業社会の崩壊の時代」との歴史認識で現実の事態を考えてみたいと思う。

現代の経済はインフレーションと経済停滞との共存というかつてのイギリス経済に典型的であった事態が国際的に共通なものになり、世界的な規模でのスタグフレーションが現代経済学の最大の関心事である。スタグフレーション論に見られる分析視座の特徴は、景気循環論的思考に大きな影響を受けて、今日の事態を景気後退の一局面と見做すところにある。事態を構造的なものと把握する場合でもその視座の影を落としている。問題の本質に一歩近づいていないうらみがあり、〝一つの時代の終焉という性格の強い事態〟であるとの認識に乏しいように思われる。確かに、一九七四・七五年の景気後退は戦後資本主義にとっての最大級の落ち込みには間違いないが、事態の推移はかつての景気後退に比べれば規模においても内容においても極めてドラスチックであった。巨大化の一途をたどり続

けている科学技術の「進歩」、過剰浪費による再生不能な天然資源の枯渇化、公害問題、とどまるところを知らない都市化現象（巨大都市の出現と農村の都市化、農業の工業化）、慢性的なインフレーション（世界インフレーションを含む）、第三世界での〈低開発〉（生命線以下の飢餓状態と貧困、国際分業体系へのさらなる組み込みなど）、世界的な規模での軍事的核の脅威、などと結びつけて事態の推移を見る必要があるように思われる。

このように考えるならば、われわれは資本主義社会そのものの歴史的な再検討をせまられているのではなかろうか。資本主義社会、社会主義社会といった思考様式を取り払い、資本主義の形態を採っている産業社会、社会主義の形態を採っている産業社会に分析の手を延ばす必要があるように思われる。E・F・シュマッハーは、この産業社会に焦点をあてる形で現代の問題に鋭く切り込んでいる。彼は「産業社会を襲う五つの波」と称して次のように指摘し、現代産業社会のつくり出す分裂、破壊、収奪、堕落、暴力の実態を正確にとらえている。(1)　産業社会は、社会の中にある、ある種の有機的な関係を分断してしまったばかりか、いまだに分断し続けている。その結果、世界人口があくなき成長を続けたあげく、ついに人間の生存手段で支えられる人口水準さえこえてしまった。(2)　産業社会は、そのほかにもある種の有機的な関係をも分断しており、その結果、人間の生存手段そのものを脅かし、毒物をばらまき、食糧不足などをもたらしている。(3)　産業社会は、おもに燃料と鉱物など、すでに乏しくなった再生不能の鉱物資源の収奪を急速に続けている。(4)　産業社会は、人間の徳性と知性の堕落を誘い、高度に複雑な生活様式を生み出している。ところが、この生活様式を円滑に運営するためには、徳性と知性を不断に高めなくてはならない。(5)　産業社会は暴力を醸成する。それは

自然に対する暴力であり、これはいついかなる瞬間にも、人間同士への暴力へと発展しかねない。[3]

われわれ現代人は、この産業社会の巨大で複雑な社会システムに従属し、管理され、押しつぶされそうな気配である。E・F・シュマッハーが「現代のシステムそのものがテクノロジーの産物であり、しかも必然的な産物であることも、まぎれもない事実である」[4]と断言するように、現代産業社会のシステムは巨大科学技術のうえに聳え立つ摩天楼のごときものである。巨大科学技術が光だとすれば、その光が生み出すのが影としての人間と自然の崩壊である。光と影とは現代産業社会における二面性ではない。二面性としてのとらえ方は、良い面と悪い面とを区別することで結局は必要悪になってしまい、事態の本質は消え失せてしまう。「光が影をつくる」のであって現代産業社会の特徴もそこに見出しうる。科学技術は「経済」と結びつき、経済的＝貨幣的価値を判断基準にして「光」として享受されてきた。その光は、市場経済的価値を付与されてわれわれの生活の毛細血管にまで侵入している。われわれは、「経済」の意味を広義にとらえかえすと同時に、具体的人間のくらしの中に位置づけていかなければならないだろう。現代を「歴史としての現代」として人類史の中に位置づけ、相対化することが重要である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com